俺はまた小さくなる魔法で
女の子に踏まれようと思った。
物陰に潜んでいると足音が。
女子高生だった。それもうちの
クラスメートの餅ケ浜　春花
だった。

春花は男っぽい、ボーイッシュな
女子で、ソフトボール部に入っている。
女子らしいシャンプーの匂いよりは
汗の匂いがする。今も汗だくで
歩いている。時間的に部活が
終わった後なのだろう。
俺はクラスメートを対象に
することに少し悩んだ。
しかし・・・

俺は春花の汗をかいた太ももと
紺ハイソックスを履いた脚を見ると
春花に向かってそっと近づいていた。
決めた。今日は春花にしよう。
バレないよう慎重に近づき、
春花の足元まで来た。おお、でかい。
前回は小学生だったからなおさら
女子高生の春花を下から見上げると
その大きさに圧倒された。春花は俺より少し
低いくらいだ。165cmくらいか。そうなると今の
俺には80mに相当する。

春花の右足に
飛び乗ろう。
俺は踏まれないように
飛び移る。
足もすごく大きい。
一歩踏むごとに俺の
周りの地面が少し
揺れる。こんな足に
踏まれたら一発で
ぺちゃんこだな。

くつひもに手が
届いた。よしあとは
靴と足の間に収まる
だけだ。俺は歩行で
激しく動く足から
落とされないように
ふんばった。

よし。成功だ。
あとはバレないよう
春花の家まで行く
だけ。余裕ができた俺は
上を見上げたり春花の
少し汚れたスニーカーを
観察した。この靴、かなり
履き古してるな。うむ。
かなり汗臭い。

春花は「暑い、暑い～」と
びっしょりと汗をかいていた。
彼女はどうやら相当な暑がり
らしい。それも汗っかきだ。
俺は春花の少し日に焼けた肌に
汗がしたたる様子を眺めていた。

『ふぃ～あっつ～』
春花は家につくとすぐさま
冷房をつけ、かばんを雑に
置いた。がさつな奴だなと
思いながら俺は春花の靴下
に入っていた。
靴下の締め付け
と春花の筋肉質な
ふくらはぎに挟まれて
至福のひとときだ。

『ぶは～っ！涼しい～っ！』
春花はでかい声で溜息をつき、がばっと脚を開いてどさっとベッドに腰かけた。ほんとがさつな女だ。
俺は靴下から出て、そっと床に降りた。そして春花を見上げた。胸、でかいな。それにふくらはぎも結構筋肉があって…いいな。俺は春花に見とれそうになった。

『ふぃ～やっぱクーラー最高～』
春花はのんびりと涼んでいるようだ。俺はその間に春花の足の裏に向かった。
すごく汗臭い。かなり湿っている。
今日は体育もあった。だからか春花の足はすごくくさかった。
予想通りの汗臭さに俺は興奮した。勃起もした。いつもは春花のことこんな風に見てなかったけど。でも今はすごくエロい。

「ふわああ…疲れたし
眠くなってきちゃった」
春花は大あくびをした。
彼女はソフトボール部の
キャプテン。すごく疲れたの
だろうか。俺はベッドの下に隠れた。
すると春花はベッドに横になった。
寝るのか。

春花はぐうぐうと
眠り始めた。汗だくのまま
ベッドインか。しかし
なんという色気のない
寝相だ。蟹股だし…。

だが、そんながさつなとこに
魅力を感じ始めた俺は、春花
の足に近づいた。こいつ、
男っぽいのに靴下に♡柄が
ある。少しかわいいな…。

俺は深々と春花に
一礼した。勝手に部屋に
入って悪いな…春花。

それから足の
匂いなんか
嗅いですまん。

しかしこれで
ゆっくり春花の
足を堪能できる。
起こさないよう
慎重に行こう。

春花の足は25cmくらいか
そそり立つ足を見上げた。
すごく汚れた靴下だ。

毛玉だらけで指の跡が白く残っている。春花の汗と汚れでこんな風になっているのか。
俺は勃起した。
春花の脚を包む紺ハイソックス。
筋肉質で少し太い春花の脚。

足の裏を堪能した俺は
顔の方へ向かった。
ふともも・・・春花は
ソフトボール部で鍛えて
いるからかすごく
たくましい。

手の方まで来た。
運動をしているのに
綺麗な手だな。女の子
らしい手だ。

俺はなんとなく小指を
持ち上げた。重い。今の
俺には小指さえ重い。
そして指にはタコが
できていた。

部活頑張っているんだな
春花・・・

いよいよ顔だ。
春花はすーすーと小さな
寝息をたてている。
髪の毛からはシャンプー
と汗の匂いがした。
春花の汗の匂いは
良い匂いがした。

春花の寝顔か・・・
女の子の顔をこんな近くで
見るなんて初めてだ。春花は
けっこうかわい。今まで何故
春花に惚れなかったのだろう。

春花は気持ちよさそうに眠っている。
日に焼けた肌。綺麗な髪。
そして、汗の匂い。
俺は春花の汗の匂いに惹かれた。

春花は汗っかきなのを気にしているのだろうか。しかし、俺は春花の汗っかきなとこが好きになってきた。
しばらく髪の毛や汗の匂いを嗅いでいた。

春花は寝がえりをうった。俺はそっと避けると、春花の顔がより近づいたのを見た。これなら…春花にキスできるかな。

俺はドキドキしていた。女の子の、春花の顔がすぐ傍に。すーすーと寝息が聞こえる。春花、ごめんな。でも俺は我慢できない。

春花の口元に近づいた。髪を踏んでごめんな。
と謝りながら、俺は春花の寝息を浴びた。
春花の息。スポーツドリンクの香りがした。
いくぞ。いよいよ春花にキスするんだ。

『・・んん？なんだ？』
春花が起きた。
俺は手で払いのけられ、宙を舞った。
『うおっ』声を押し殺しながら落下した。
俺は床まで落ちた。春花は目を覚ましたようだ。まずい！バレてしまう！

『えええっ！なにこれ！』
春花にバレた。
『なになに！虫!?じゃない
小人!?』
『ってこれ北浜じゃん！
うちのクラスメートの』
俺はどうしたらいいか
わからず硬直していた。
バレた。終わりだ。
春花がびっくりしている間に
どこかに隠れるか・・・
そう考えていると。

春花はどうやらまだ
寝ぼけているのか
夢だと思い始めて
いるようだ。

よかった。これならなんとか
言い逃れをしてここから
出ていこう。そう思っていたら。

『えへへ～そんじゃあ
こうしちゃってもいいよな！』

春花が悪い顔をした。
そして、右足を上げた。
春花!?どうするつもりだ。

「おりゃあ～っ！
勝手にあたしの部屋に
入りやがってこの変態が！」
すごい音がして春花の
足が降り降ろされた。
俺は風圧で飛ばされた。
ズスンッ!!

「そんな悪い虫は
あたしが踏みつぶして
退治したげる～！」
春花はいたずらっぽくそう
言い、右足を上げた。
春花は完全に夢だと思って
いるらしい。俺を踏みつぶす
つもりだ！

「がお～っ！怪獣だぞ～！
どうだ参ったかこの
チビ助め！」
春花は怪獣のふりをしながら
俺を思い切り踏みつけた。
つぶれる…！そしてものすごく
汗くさい！女子の足とは思えない。

「うりゃうりゃ～！
つぶれちゃえ～この虫め！
春花様を怒らせたら
怖いんだぞ～！」
ものすごい力だ…
それ以上に汗くさすぎる。
俺は、激しく勃起していた。春花に
踏みつけられていることと汗の匂いに
興奮していた。

「ほれほれ北浜～少しは抵抗してみろよ！
このままじゃあたしに踏みつぶされちゃうぞ？
それでもいいのかあ！」
春花は相変わらず
いたずらっぽく俺に
語りかける。抵抗なんかできるか！
重い・・・動けない。そして、春花。お前の足
くさくて、最高なんだよ・・・。

春花の足。靴下も汚くて、汗で濡れていて。
俺は少し春花の汗を飲んだ。靴下からしみ
出した汗を飲んだ。くさいししょっぱい。
俺のペニスは爆発しそうだった。
春花はなおも体重をかけ、
俺をつぶそうとしてくる。
俺は意識が遠のいてきた。
このまま、踏みつぶされよう。
汗臭い足に。毛玉だらけの靴下に
こびりつこう。

クラスメートに踏みつぶされるなんてな。
それもこんながさつで男っぽい女子に。
汗臭い春花なんかに。
『・・・春花・・・俺は・・・・！』
そう言いかけたとき
春花は足をあげた。『ぶはっ！』
俺は肺いっぱいに春花の
汗臭い足の匂いを吸い込んだ。

春花は一度足を上げ
また踏みつけてきた。
「うりゃうりゃ～！
マジでつぶしちゃうぞ～？
いいのか北浜～」
春花の激しい踏みつけに俺は
「春花様！許してください！」
そう許しを請うた。

「そうか許してほしい？
じゃあ今からあたしが言うことに
従って！そうしたら許して
あげるよ！」
俺は苦しかったためとっさに
「何でもします！」そう言った。

「あたしの足舐めてみろ
そうしたら許したげる」
春花は巨大な足を俺に
差し出してきた。

舐める？こんな汚い足を？
毛玉まみれで汚れが足の指
の形についているような
こんな汚い足の裏をか？
春花の足の裏を・・・舐める
なんて。俺は射精しそうに
なった。

俺はがむしゃらに春花の足の裏を
舐めた。「春花・・・春花・・・様！」
気づけば春花様と呼んでいた。
クラスメートに様づけをしていた。
臭い。汗臭い。臭すぎて意識が飛びそうだ。
体育と部活後の足の匂いと汗がしみこんだ
春花の足を必死に舐めた。
毛玉まで舐めとった。
春花はそんな俺を小動物を
見るような目で見ていた。

「うっそ～！ほんとに舐めてるよ
あはは！良い子だな北浜～お前は
もうあたしのペットだ！ご主人様の
言うことちゃんと聞くんだぞ？」
春花はいたずらっぽくそう言った。
俺は春花のペット？このままこいつに
飼われるのもいいな。
「春花様！ありがとうございます！」
俺は春花に感謝した。

春花は笑いながら俺の様子を見ていた。
「あははっ！今日この靴下履いて体育したんだよ～？くせえだろ～？どうだ！あはははっ！もっと舐めて靴下の汚れを落とすんだぞ北浜！あたしがお前のご主人様なんだからな！」
俺はぼうっとする意識の中
「春花様！ありがとうございます。春花様はとてもかわいいです」
そんなことを言っていた。
俺の、春花に対する気持ちが溢れて出ていた。

すると春花は俺を軽く蹴り飛ばした。
俺は飛ばされた。ギンギンに勃起しながら。
「えへへ～お前みたいな足の裏舐めちゃうようなきもいペットいらな～い！」
春花は俺が気に入らなかったみたいだ。

俺はもう春花になら何をされても
よくなった。「春花様！許してください！
なんでもします！」俺はご主人様に
許しを請うた。でももちろんお仕置き
されたかった。
「だめー！あたしがお前のご主人様だ！
だからあたしの言うことは絶対なんだよ！
いいかチビ助！お前なんか～春花様が
踏みつぶして、ぐちゃぐちゃにしてこの
汚い靴下にしみつかせたげる！」

春花はジャンプした。
それも高く。両足を
大きく上げて。
その瞬間、周りの動きが
遅く感じた。春花がゆっくりと
舞い上がった。

「覚悟しろ北浜〜！
つぶしてやる〜！」
春花は、いやご主人様は
そう言った。そう、
もちろん冗談で
やっている。
春花は今の
出来事を全部
夢だと思ってる。
全部夢。
だけど俺は・・・
春花に

殺意
そう害虫を殺すような
殺意を春花に向けられた。
俺は・・・春花にとって
そんな存在なのか・・・
そう思うと俺は
射精した。
何故だろう
クラスメートに
春花に殺意を
向けられて
射精？自分でも
あきれる変態だ。
でも俺は・・・
嬉しかった。

「春花様！
ありがとうございます！」
俺がそう言い終わらないうちに
春花の足が
どんどんと
迫ってきて…

ブギャッ!!!
俺は春花に
踏み殺された。

春花のキック力はものすごかった。
身長2cmの俺の身体は一瞬で
つぶれた。俺は春花の毛玉だらけの
靴下にべったりとこびりついた。
ペニスと睾丸もこなごなだ。
睾丸の中の精液が勢いよく飛び出した。
俺は、春花に踏みつぶされたのだ。

『うっわぁ～すっご…
ぐちゃぐちゃじゃん。これ。
夢とはいえけっこうリアル～
小人踏みつぶすとこんな感じ
なのかな…』
春花はそう言い、しばらく
靴下のシミになった俺を
眺めていた。

「思い切り踏んづけちゃったよ。
なんか北浜に悪いかな。でもなんで
あたしの夢に、それも小人で
出てきたんだろ。今日そういえば
体育終わりにハンカチ忘れた
あたしにタオル貸してくれた
っけ。いいやつなのに、あたし
踏みつぶしちゃった。
サイテーだな。」

「もう一回寝よう。
そうしたらこの変な夢も
終わるよね！でもぐちゃって
感触、リアルだった～。
小っちゃい北浜を
踏みつぶしちゃう夢
なんて、ほんと変なの・・・・」
春花はベッドに横に
なった。俺は生き返りの
魔法を使った。
ご主人様の寝息が
聞こえ始めた。
「春花様。おやすみなさい。」
そして俺は全裸になると
左足にペニスをこすりつけ
何度も射精した。

春花はぐうぐうと
寝ている。俺は、今日まで
春花のことをただの
クラスメートだと思って
いた。しかし、今日からは
春花は・・・

「春花様・・・！
春花様・・・！」
そう小さく呟きながら
春花の足に射精した。

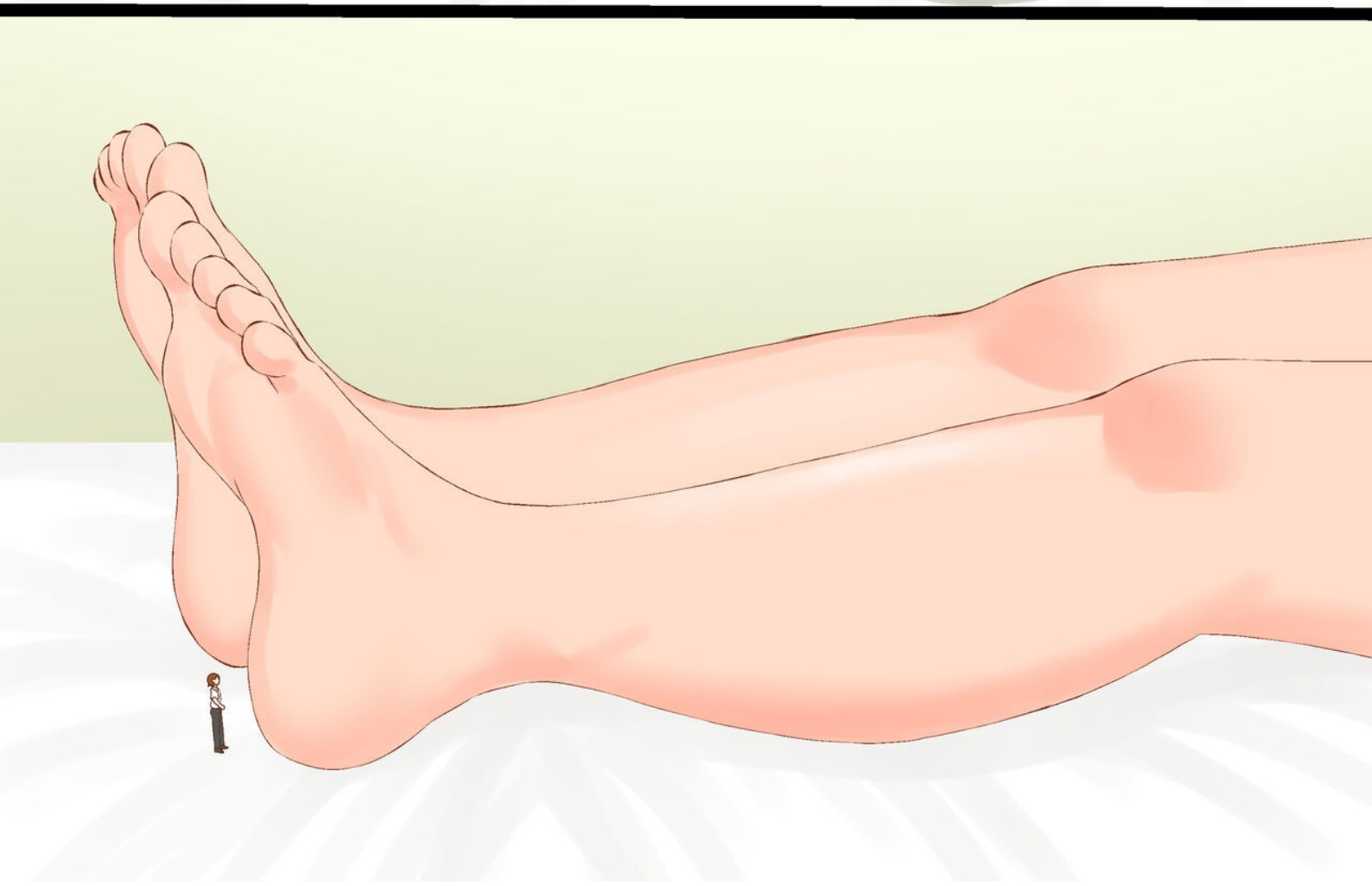
俺は心底
このまま踏みつぶされて
春花の靴下になってしまおう
と思った。春花の足、汗の
匂いはすごく良い匂い
だから・・・。

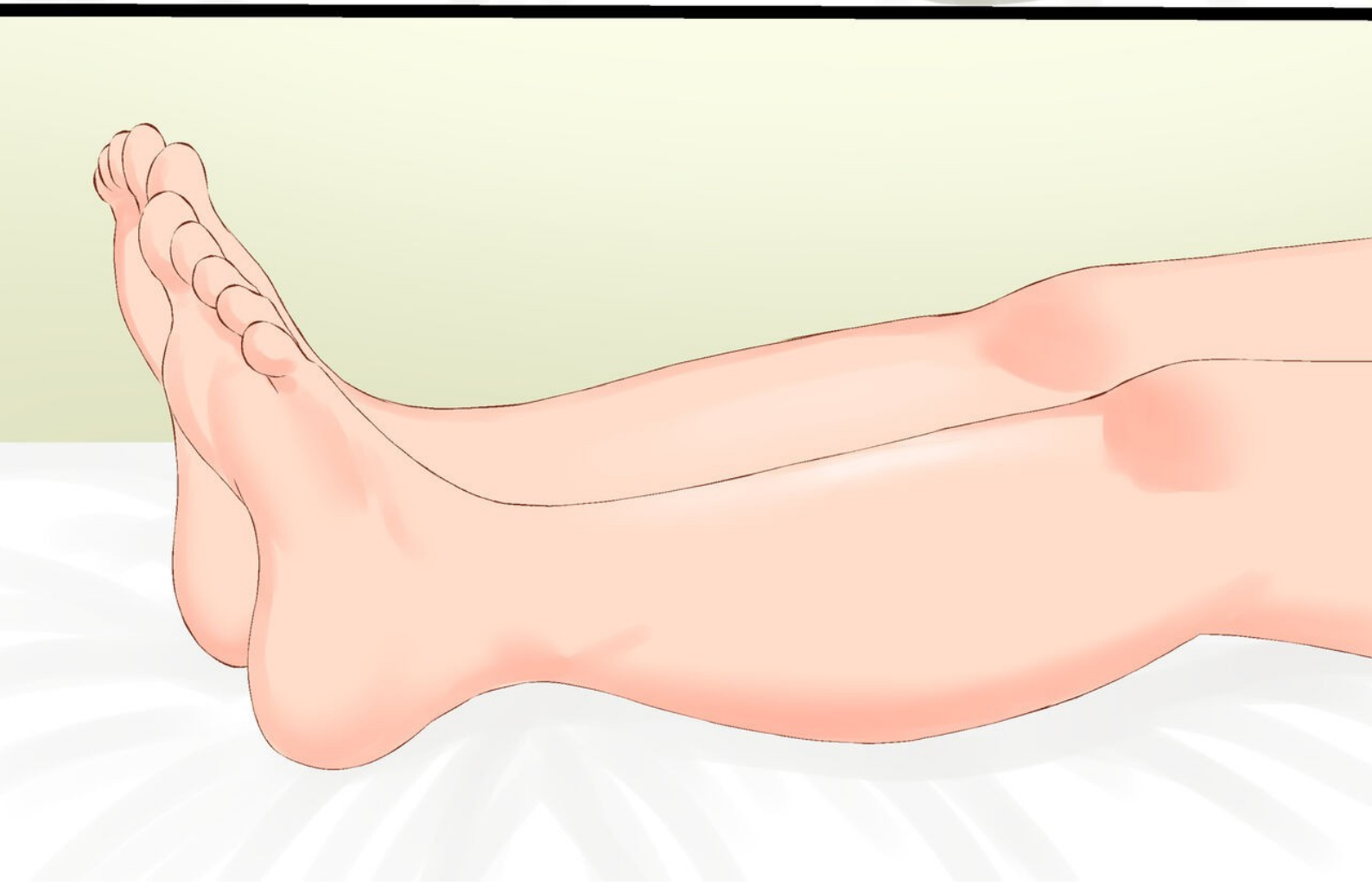
翌日。
俺は昨日のことを思い出しながら授業開始を待っていた。
ほんとにすごい体験だった。俺はこの魔法を手に入れたことに感謝した。

春花とはこれからもクラスメートとして接しよう。変な気を起こしちゃいかん。
昨日のことは俺の記憶の中だけだ。
俺は春花とそれほど会話をしてこなかった。
だからこれからもただのクラスメートだ。

『よっ北浜』
春花があいさつをしてきた。
「!?お、お、おう!おはよう」
びっくりして変な声が
出た。
「ん?どうしたんだよ?
それより、ほら。昨日
貸してくれたタオル。
ちゃんと洗ったから
返すね。

「お、おう」
「今日も体育あるとか面倒くせーな！そんじゃな！」
春花は席についた。
春花と少し距離が縮まったのだろうか。いや、ただタオルを返しに来ただけだろう。きっとそのはずだ。でもその後、春花に缶ジュースをおごられた。





ズスンッ!!

ダ
ッ
ヤッ!!!